

人間の底を見なきや(ルカ 14:7-14)

どんな人が答えのある勝利の人生を歩くようになるのでしょうか。みなが、特に信者の私たちは、そのような人生を歩く主人公になりたいと願っていると思います。それは今日の聖書を通して教えられる答えであり、私たちが普段、こういう人がこのようになればと思っていることとはだいぶかけ離れている、違う話になるということを、まず心に留めてメッセージを聞いていただきたいと思います。

イエス様が今日おっしゃいましたことばの中に、自分を低くする者がということが紹介されています。つまり、人間が、自分自身がどんなものなのかを正しく知る人が勝利の人生を歩むようになります。もし教会に通っている人でも、自分が、人間がどんな存在なのかを聖書が教えている通りに正しく分かっていないと、その人は礼拝を捧げているにもかかわらず、実際に福音は理解できません。教会に通っていて、自分なりに奉仕をしたり、祈りも捧げているかもしれません。聖書を読んでいるかもしれません。また、聖書に書いてある通りに守ろうという覚悟もあるかもしれません。しかし、自分自身が、人間が本当にどんな存在なのかに気づいていないと、福音は理解できません。結果、礼拝を捧げても、講壇のメッセージがその人に刺さることなどありません。自分なりに良かった、恵まれたと言っても、それは自分の願望に基づいて、自分の基準に基づいてのお話であって、本当の意味で神様が語りたいこと、神様の御声として、その人の心に刺さることなどはありません。なんと残念で悲しいことでしょうか。結果、礼拝を捧げていても、礼拝に失敗してしまいます。信者が礼拝に失敗することは、人生すべてに失敗するということなので、勝利ある答えの人生、その人のゆえに周りが、ほかの人が本当の意味で光によって助かる、そのような人生は見ることができません。なので、今日、聖書を通して、イエス様がおっしゃることを通して、人間とはどんな存在なのか、自分自身はどんなもののかということにぜひ気づいていただきたいと思います。それに気づくことになれば、必ず答えのある勝利の人生、つまり、その人がいるところ、行くところ暗闇が碎かれて、いのちの光が照らされ、いのちが生かされる、いのちの運動が行われることになります。なので、それをいちばん恐れている、それを嫌がっている目に見えない靈の存在、悪魔サタンは、それだけはならないように必死で働くものなのです。

1. サタンは人間の底(靈的根本だけは見られないように働く。(1-6)

第1、サタンは私たちが、特に信者の私たちが、人間の底、靈的根本だけは見ることができないように必死で働いてるということに気づかなければいけません。それが、今日読んでいませんが1節から6節までの内容です。以前、イエス様が18年間悪霊にとりつかれて病気をしていた人を安息日に癒されたことがあります。その時に、何も言わずに、その病気の人をイエス様が癒されたことを見て、パリサイ人たちは怒りを露わにしました。安息日に何をしているのかと。そこでイエス様は、何が安息日なのかについてお話をされて、彼らを圧倒されました。真理が何かを解き明かしたわけです。ならば、今まで自分たちは間違っていたんだな、勘違いしていたんだなと気づいて、悔い改めてイエス様のお話に耳を傾けることが筋でしょう。1節から6節を見ますと、同じその場面、シチュエーションが許されます。安息日に病気の人がいて、イエス様がその人を癒そうとするその前にイエス様が先に聞かれます。「安息日にこのような苦しんでいる人々を助けることがあつてているのか、間違いなのか」とイエス様の方から声をかけます。以前に一回、そういう経験があるので、学習した者であればそこで「おっしゃる通りです。安息日は安息日という日にちを守るものではなくて、本当に悪霊に憑りつかれている、暗闇の死の力に溺れている人々を助けて、真の安息を与えることが正解です」と言うはずなのに、彼らは黙って何も言いませんでした。黙って言わな

いということは、言うべきことがないからではなくて、以前、安息日について、つまり福音についてお話を聞いたにもかかわらず、全く信じる気はないわけです。でも、彼らの矛盾が露わになっていたので、最初は怒りを露わにしていたものがこれからできないし、文句を言えないような状態なのです。つまり、彼らは信じることはできないのです。信じようとしません。

1) 先に入った思想(考え)-真理拒否

なぜかと言いますと、彼らには先に入っていた先入観、先に彼らの中に入り込んで刻印されていた考えのままなのです。この安息日の主、キリストの福音を受け入れない限り、先に入っていた刻印されている考え方、それがどんなものであろうがそれは真理を拒否することになります。先に入っていたものは、東から入ったのか、西から入ったのか、教育によるものなのか、経験によるものなのか、心の傷によるものなのか、どんなものであれ、そして、それが今現在、社会に必要なもののか、そうでないかなどと全く関係なく、福音、キリスト以前に入っているものが考えの中に刻印されてるものは、必ず福音の真理を拒否することになります。彼らは選民の思想というものが先に入っていました。その思想を捨てない限りは、安息日のキリストの福音を受け入れることはできません。選民なのだから。安息などが必要ということは、彼らとは無縁の話のように思うしかありません。また、律法が先に入っていて、律法主義に固まっていました。律法は神様のものなのです。しかし、その律法をメインにする律法主義に走ることになれば、真理は拒否することになります。律法を守れる者なのだから。真理というのは、あなたがたはその律法、ルール、決まりなどを守ることができない存在なのですよということを語るためのものなのです。なのに、律法主義というものは、福音とキリストは要りません。律法があるから、ルールがあるから、決まりがあるから、規則があるから、伝統があるから、教訓があるから、私たちはそれを守ればよいという方向に走りますので、キリストを拒否することになります。このような内容がイスラエルだけではなくて、イスラエルはそのように極められていただけであって、いちばん根底の方には、神を離れた罪人の本性、世の流れというもの、それがヒューマニズムなのです。人間主義、人間に可能性あるというそのような考え方方が先に入っている限りは、安息日の主、キリストの福音を拒否することになります。そのヒューマニズムによって人間に必要なのは宗教的な行いが求められるという考えがその人々の中に入り込むようになります。宗教を信じているかどうか別にして、人間の基準は宗教的な因果応報の法則に基づいた行いがすべての評価の基準になります。そのような考え方を持っている限り、キリストを拒否するしかありません。みな人それぞれキリストを知る以前に教会に通っていても、本当にキリストが正しく理解できる以前には、先に入っているものがあるわけです。それによってキリストを拒否することになります。

2) 人間のうわべだけ-可能性前提

結局、人間のうわべだけを見て、いろいろな論理を展開して、いろいろな評価をすることになります。うわべだけというのは、肉眼で見られるものだけのことではありません。肉眼で見えなくても靈的なこととは関係ない内容を全部うわべと言います。うわべだけで論ずるということになるのは何が前提なのかというと、人間には可能性があるということが大前提なのです。だからうわべによって良い悪い、上下とかいろいろなことを考えるわけです。本当のことがわかればそのような評価は無用なのです。このようにして彼ら、人々は、先に入っているものがその人の考え方になって、結果、キリストを信じることができないし、拒否する方向に走ることになるということが今日の聖書から、特にパリサイ人から見られるわけです。

3) 矛盾と限界を見ても

そして、先ほど申し上げましたように、以前の安息日に、彼らのそのような考え方、彼らが信じてる信念というものが矛盾だらけであり、限界だらけなんだということが露わになりました。にも関わ

らず、自分をへし折ってキリストを信じようとしないわけです。先に入っているものによって拒否するだけではなく、それは違うよ、そうではないよということが明らかにされたにもかかわらず黙っていて、イエス様がおっしゃることを信じようとしません。

4) サタンに捕えられた考え

なぜなのでしょうか。先に入っている何かの考え方があるからでしょうか。その裏で、目に見えない悪魔サタンが悪霊を通して真理の前に先に入って、その人の考え方を捕らえ利用して、その人を捕らえるからなのです。だから、矛盾が明らかになって限界を見たにもかかわらず、屈服しないのです。私たちは論破されると納得して信じて受け入れるだろうという思いがあるかもしれません。しかし、信じるということはそんな簡単な話ではありません。自分の理論が、自分の主張が間違ったということになったからといって跪くわけではありません。絶対信じないです。先に入っているものを捕えて、目に見えない悪魔サタのパシリである悪霊がその人の考え方を捕らえ動かしているので、信じることはできません。なぜなのでしょうか。悪魔サタンは最後の最後まで自分の中に入っている思い、考えに突っ走ることによって、人間の本当の姿に気づかないようにします。それが悪魔の狙いであり、悪魔の願いなのです。とにかく、自分が今まで習ってきたこと、経験してきたこと、信じてきたこと、自分が頼りにしていた自分の中に何かの考えがあるかもしれません。それでいいんだよ。それでずっと突っ走りなさいよと。いちばん最初、アダムに向かって神様がおっしゃった内容は、違うよ、あれを食べると神のようになるから、あなたの思い通りに突っ走りなさいよということで、人間の絶望は始まったわけです。今も世の中のすべての人はそのように囁かれて、それにすべてをかけて希望を託して走り続けるわけです。だから、キリストの福音を聞いてても拒否してしまいます。なぜなのでしょうか。なぜ限界を見たにもかかわらず、矛盾が明らかにされたにもかかわらず、屈服しないのでしょうか。論理の話ではありません。目に見えない悪霊がその人の考え方を捕らえているからなのです。そこだけは悪魔は譲りたくありません。話をそのまま受け入れると、人間がどんなものなのか、自分自身がどんな存在なのか、それに気づくようになるので、そうなるとおしまいなのです。それに気づきますと、悪魔は、暗闇の力は全部碎かれることになります。なので、必死になって先にあなたの中に入っているその考えにすがりついて、絶対離れてはいけませんよ。矛盾がどうのこうの関係ないよと、悪魔も必死なのです。それをまずしっかり理解し、把握して、クリスチヤンとして神様のみことばに耳を傾けないといけません。しかしながら神様は、そのような悪魔のしわざを打ち壊して、人々に人間の底、人間の靈的根本を見るように恵みを与えられます。聖霊によらずには、それを見ることはできません。ただ素晴らしい論理的にお話をすると納得するわけではありません。靈的な戦いなのです。神様は、キリストは、その人が悪魔のしわざから解放されて、人間の底、自分の靈的根本を見るように恵みを与えられるということを覚えてください。

2. 人間の底(靈的根本)を見た人は謙虚になる。(7-11)

それで、その恵みによって、人間の底を見た人は謙虚になります。それが今日お読みしました聖書の箇所のメインテーマです。

1) 上座を降りて

何かのところで上座に座ろうとします。パリサイ人たちは。それで道徳的にマナーの面でそれはダメですよという風に指摘しているわけではありません。なぜパリサイ人はそういう行動をとるのかと言いますと、元々自分が誰なのかが分かっていないから、パリサイ人は階級的に少し上なので、私は大丈夫な人間、偉い人間だと思っているわけです。そこを今指摘してらっしゃるわけです。

2) 末席に行き

そこから降りてきて、最初から末席の方に行きなさいよと。つまり、パリサイ人が今勘違いしていることを指摘しながらおっしゃっている場面なのです。神の恵みによって、悪魔が必死になって人の心の内側に破れない要塞を作つて、とにかく人間の根本、靈的根本を見ることができないよう に、今までに入っていた今までの考え方通りにとにかく守り通しなさいよと必死になつて働いてるところに、キリストの御名によって聖靈が働くで、その惡靈の力が縛り上げられて、人の目が開かれます。あー、なるほど。違うな。今まで勘違いして騙されていたんだねと。あるアル中の人人が、アルコールが問題だと、そのアルコールに溺れるしかない自分の今までの人生経験や心の傷等々にずっと悩んでいたわけです。だからメッセージが聞こえないのです。メッセージが聞ける場にずっといらっしゃることが恵みなのですが聞こえないのです。なぜでしょうか。その人の考えを惡靈が捕らえているから、礼拝の場に来ているのに聞こえない。そういうことがあるのでしょうか。十分あります。教会にまで行かせて礼拝を捧げるようには悪魔は許して、とにかく人の底、靈的根本だけは聞かないように働いてるのです。それで、そのアル中の人がある日、神様の恵みによってメッセージの内容が聞こえました。いつものメッセージなのですが、なるほど、私の問題が、今まで自分が問題だと思っていたそれが問題ではなくて、私の問題が、もしかしたら今先生がおっしゃっている靈的な問題、惡靈による問題なのか、より根本的な問題なのかと考え始めるようになったとき、その日の夜、家に帰られた時に、体全身が震えながら、泡を出しながら惡靈が逃げていきました。それから、アルコールを断ち切るようになりました。アルコールを断ち切ったのが答えとか問題ではありません。惡魔がどのようにクリスチャン、教会に通つて私たちを惑わしているのか、よく聞かなければいけません。キリスト、キリストと言いながらも、聖書が私たちに語つてゐる惡靈が恐れるそのキリストではなくて、自分の作り上げたキリストになつてしまふと、そこには何の力も答えもありません。むしろ惡魔の狙い通りなので、惡魔が喜んでいくらでも遊べるわけです。しかし、神の恵みによって人間の底、靈的根本を見た人は末席の方に下ることになります。

3) 自らの勘違いを捨てて

今まで何も知らずに勘違いして上座の方で自分はこれだあれだといろいろ思つてたそこから末席の方に行くように、自らの勘違いを全部捨てて、親のせいだとか、家庭環境のせいだとか、いじめのせいだとか、自分の性格が悪いからとか、頭悪いからとか、事故にあったから、障害を抱えているから、小さい時に親に捨てられた、あるいは暴力振るわれた、性的な暴力も振るわれたとさまざまなものがあって、それが問題だと。それで今私はこうなんだ。性格も仕方なくこうなるしかないと思っていた。それがすべて勘違いだと思い捨てることになります。それが人から見たときに否定的なのか肯定的なのか関係なく上座なのです。なぜ上座なのですか。上座という意味は、日本語は良いと思いますよ。上（うえ）なのですが（かみ）と読みます。あなたが神のようになるよと言われたそのことではないでしょうか。自分勝手に考えるわけです。神様がおっしゃったことは聞く耳を持たないで。それが惡魔の狙いなのです。それに気づいて、自らの勘違いを全部捨てて、ああ、私は良かったね。優しい親元で生まれて、良い教育を受けて、だから私はこういう人間だ…。それも勘違いなのです。それも上座なのです。私は小さい時に親に捨てられたんだ。寂しい人間だ…。それも上座です。神様が何をどういう風におっしゃるかとは全く関係なく、わがままなのです。自分の思うがままなのです。自分、肉、この世という本性のままなのです。神様を離れた人の罪の本能の特徴そのものなのです。

4) 人間の真実を

そこから人間の底を見た人は謙虚になります。そこから解放されて自由になります。そこ全部捨てて、人間の、自分の真実に向き合うことになります。なるほど、私は誰かのせい、何かがあつてこうなつたではなくて、元々生まれた時から、生まれる前から靈が死んでいるものだったんだ。あな

たがたは、自分の罪と罪過の中にあって死んでいたものであって。なぜそれがわかるのでしょうか。キリストが私のために十字架で血を流されて死なれました。それが皆さんのが問題だと思っているその問題のためでしょうか。そのことならばお寺の方に行つても構いません。十字架で神の御子、神様ご自身が私のために血を流されて死ぬしかない理由は、それどころではありません。生まれる前から罪人なのです。生まれた途端に神の御怒りを受けるしかしない滅びの子として生まれます。靈が死んだというのは、神様を離れて悪魔サタンの奴隸となって、罪とのろいの運命に縛られているということなのです。自分自身がそのようなものなんだ。人間というのはうわざがどうであれ、そのような存在だということに気づかなければ人生は始まりません。そうなのかどうかを具体的にはどうやって分かるのかと言いますと、生まれたときから人間はみな自分が中心なのです。神様なんか眼中にもありません。知ることも信じることもできません。だから、神様を排除した自己中心、自分中心になるというのが、世の中ではお前が人生の主人なんだ、お前次第だと言っているから、それが正解のように思われるかもしれません。しかしそれが、自分、靈が死んでいる裏返しなのです。靈が死んでいるから自分中心になるしかありません。神を離れて悪魔の奴隸になっているので、その裏返しとして目に見える肉のものが中心なのです。お金さえあれば幸せになるだろうと思い、裕福な環境が許されれば安泰できると思うこと自体が、私は靈が死んでいるという裏返しなのです。世の中では当たり前でしようけれども、信者の私たちはそれに気づいて、自分にどのような刻印があるということに気づいて、そこが碎かれ、そこが変えられるようにならないといけません。目に見えないこの世がすべてであり、この世で成功すること、この世で認められることが成功だと思うようになります。世の中ではみなそう思っているし、それが当たり前でしょうが、それが靈が死んだという裏返しなのです。靈が生かされているものは、レムナント7人を見てください。自分中心ではありません。主は私の牧場の羊飼いであり、目に見えるものではありません。命が奪われても、神の契約、キリストが中心なのです。神の計画が中心なのです。世の中の成功などは中心ではありません。この世はもうしばらくして滅びる城なので、そこで成功することを目標にして人生を生きるということはなんと残念でしょうか。この世を助けようとしてらっしゃる神の願い、福音宣教こそ成功ある人生だという悟りを得るようになる、それが靈が生かされている裏返しなのです。私たちはキリストを信じて、靈は生かされていのちあるかもしれません。しかし、残念ながら状態は死んだ状態と一緒になのです。未信者ではないかもしれません。しかし、状態は、靈は生かされているのに、状態が死んだままの状態かもしれません。悪魔サタンは救われた私たちでさえ、その考えを攻撃し、今まで作り上げていた悪魔のやぐら、その要塞が崩れないように必死になって働いてるわけですから。その結果、私たちは偶像崇拜をするしかないし、宗教に溺れるしかないし、シャーマニズムなどに頼るようになるしかありません。結果、幸せになろうと思っていても、身分そのものが悪魔の子なので、その人に本当の意味で安らぎと平安は存在しないし、だから精神的にいつも不安定な状態で、それがいつか何かをきっかけにして見える形で症状として現れることになります。それが鬱であり、中毒であり、病であり、人間関係が崩壊することであり、さまざまな人生の問題として現れるようになります。何が原因なのかも知らずに思うようになり、最終的には死んで、靈が死んだままの状態なので、悪魔のために用意されているところに一緒に行くしかないし、さばかされることになります。そして、このようなろいの運命は次世代に、子孫たちにずっと受け継がれることになります。これが、人間がどんな存在なのか、私も人間であれば私がどんなものなのかに対しての聖書の教えであり啓示なのです。キリストの十字架を通して私たちに語りかけていらっしゃるメッセージなのです。残念ながら、教会に通つて礼拝を捧げている90パーセント以上の人人が未だに気づいていないのです。メッセージを聞きながらも、それが聞こえないのです。なぜでしょうか。その人の考えの中に、悪魔のパシリである悪靈、誘い込む靈が、キリストの栄光に関わる光が輝かないように思いをくらませているからなのです。そのままの状態で、何を願って、何を求めていらっしゃるのでしょうか。皆さんの祈りの課題、求めている内容がその通りに叶ったとして、それで幸せでしょうか。成功でしょうか。良かったことでしょうか。よく考え

なければいけません。

5) 信徒(教会)の勘違い

何のために礼拝にきていらっしゃるのでしょうか。この人間の真実に目が開かれたときに、その人は今までの勘違いをすべて捨てて、アル中の人人が自分の勘違いに気づいて、全部を捨てて末席の方に行きます。ああ、だからこれでもあれでもないし、こうしたらああしたらでもないし、良いか悪いか、良かったか悪かったのか一切関係なく、私は絶望なんだね。絶対不可能なんだね。キリストのほかには道はないと。皆さんのがキリストを告白するときに、ただキリストではありません。キリストのほかには道がないから、本当の人間の姿、自分が誰なのかを見た人は、特別なその依存症の人の話だろう思うと、それは勘違いです。すべての人は罪を犯したので、私がそのようなものなどと、これに気づくのはもちろん神の恵みです。皆さんのがレムナント教会に礼拝に来てらっしゃるということは、神様がそれに気づいてもらう恵みを用意して召されたと私は信じます。教会に通つていながらも、今申し上げました人間の本当の姿、靈的根本を見ることがなければ、信徒でも教会でも勘違いするしかありません。だから、キリスト、イエス様のことを、バプテスマのヨハネのように、エリヤのように、エリシャのように、預言者の一人のように扱うようになります。自分が会いたいキリストを作り上げることになります。そして、教会の中でも本当に必要な戦いではなくて、靈的な戦いではなくて、違う戦いに走ることになります。聖書を見ますと、ローマの手紙からパウロが書いた手紙にもあります。教会に書き送った手紙なのですが、その教会で起きていたその戦いなのです。違う戦い。認められるか認められないのか、誰があってるかあってないか、正しいか正しくないか、そういう戦いばかりなのです。なぜなのでしょうか。まだ自分が偉いと思っているから。本当の姿、十字架とともに死ぬしかない滅びの自分を見たことがないから、声が大きくなるし、余計なことを喋るようになります。本当のことがわかってる人は黙って祈るでしょう。誰かを批判したり、傷つけたり、傷つけられたりというようなことなどはしません。なのに、違う戦いに費やされることになります。しかし、神様の恵みによって、人間の底、自分の靈的根本を本当に見た人は、今まで精神的に囚われていたその心の傷や後ろめたさ、何かの心残りのようなものが全部消えてなくなります。それは本当の根本を、底を見ることができないように悪魔が仕掛けた嘘、罠だったのです。アルコールだ、親のせいだ、あなたがこんなむごいことをされたから等々の内容がすべて悪魔の偽りなのです。

3. 人間の底を見た人は無条件の愛をおあかしする。(12-14)

そして最後に、今日読んではいませんが、12節から14節まで見ますと、食事に人々を招待して振る舞うときのことをおっしゃいます。それもただのマナーの話ではありません。人間の底を本当に見た人は、無条件の神様の愛をおあかしするようになります。神の無条件の愛のほかに希望はありません。キリストのほかに希望はありません。私たちがまだ罪人であったときに何か良いことがあったからではなくて、一方的に無条件にご自分を十字架の犠牲にされました。その無条件の愛のほかには語ることもないし、正解も答えも希望も何もありません。人間の世界では存在しない、理解できない神様の無条件の愛。神にしかないその愛のほかに希望はないし、その愛を受けたものなので、その無条件の愛をおあかしするしかありません。そのお話なのです。

1) お返しが出来ない

お返しができないものだけを招きなさいと。私たちにお返しなどはできません。そういう愛ではありません。日本人の人間として良い習性なのですが、必ずバランスを取ろうとするのです。良いかどうか別にして、そのいちばんそこの方には島国の不安というものがあると私は思っていますが、バランスが崩れるのが怖いのです。島の中でみなが輪にならないといけないから。和。和。和が神なのです。和が宗教なのです。その中でバランスを取ろうとするので、いつももらうとお返しを必

ずしないといけないです。もちろんそれが礼儀です。韓国の人々は日本人と比べると半分ぐらいしかお返ししません。そういう習性をもってクリスチヤンになったときに、神様から与えられたものの中でお返ししますと。与えられた恵みにお返ししますと。お返しできるでしょうか。神様の私たちに対する愛、恵みは、お返しできるものではありません。私たちが献金するということは、感謝のあまりに、神の御心のために私にあるものがそのために許されたと気づいて、光の経済に変えられたので、感謝を込めて捧げるだけであって、神様の恵みとバランスを取ろうとするなどはどういうつもりなのでしょう。あなたが神のようになるよ。ほぼ一緒じゃないでしょうか。気持ちはわかりますけれども、お返しできるものではありません。だから、食事に招待する時に、お返しできるような者を招かないようにということをおっしゃいました。

2) 一方的な救い

3) 貴い恩寵

一方的な救いであります。この間も申し上げましたように、貴い恩寵なのです。だから、私たちの方からはただ信仰によって受け入れるだけなのです。あなたがただで頂いたので、ただで渡しなさいとパウロにもおっしゃいました。人間が誰なのか、人間、自分の底、靈的根本を本当に見た人は、正しいかどうか、悪いかどうか、そういう計算などありません。計算などは成り立たないです。キリストしかいらっしゃいません。神の無条件の愛だけです。その愛に感謝して、今も悪魔に騙されて縛られている、暗闇に囚われているたましいを見て、神様の無条件の愛をおあかしくしていくわけです。自分自身がその証人なので。でも、この人間の底を教会に通いながらも見ていない人は、キリスト、キリストと言ひながらも無条件の愛を受けた感謝と喜びがないので、それをおあかしするということはありません。伝道しても違うものになります。

4) ただ信仰により(ローマ 1:17、エペソ 2:8)

ただ、信仰によって、義人は信仰によって生きる。あなたがたは恵みのゆえに信仰によって救われたんだ。何も要求しないで、何の条件もありません。なぜでしょうか。私たちが人間の底、靈的根本が何か分かったとすれば、それは当たり前でしょう。条件などつけられません。地獄に行く条件しかない者なので。今日の聖書のタイトル、神様が今私たちに望んでいらっしゃることは、ほんとうにキリストの十字架を通して人間の底を見ることなのです。そのときに覚えていないといけないのは、悪魔は必死になってそれだけは邪魔しているのです。恵みを求めましょう。見るべきものが見られるように。十字架で死ぬしかない自分の絶望の靈的根本を見て、素直に認めるようにしましょう。そして、キリストが十字架で死なれたときに自分も一緒に死んだこと。そしてキリストが復活なさったときに、一緒に自分がえったことを告白しましょう。そこしか希望はありません。それで、どんな人でもキリストだけが答えになることを見て確認しましょう。皆さんの周りに家族からさまざまな人がいて、いろいろな問題を抱えているかもしれません。だから、いろいろな答えがあると勘違いしてはいけません。本当の底を見ないといけません。いま病気を患っている人、精神的に患っている人、依存症に悩んでいる人、人間関係に悩んでいる人、仕事のこと、経済のことで悩んでいる人。経済が問題ではなくて、人間関係が問題ではなくて、底を見ないといけません。人間の底を見ないと、皆さんのがその現場にいる意味がなくなります。現場のやぐら、現場の灯台として。だから、皆さんのが唯一の答え、キリストを彼らに渡すためにそこに派遣されているのに、全くそういう感覚が持てない。なぜでしょうか。人間の底を見たことがないから。もっと巻き戻して申し上げますと、自分の本当の底を見たことがないから。皆さんにさまざまな問題があったでしょう。それはその底を見るための材料なのです。それが問題ではありません。何があったでしょうか。まず自分自身から底を見ないと。それで、そのときから皆さん、周りの人々を見る目が変わります。そのときから、やぐらとして立つようになります。神様が聖靈の働きをもって、そこに尋ねてこられます。それで、答えのある勝利の人生が始まります。どんな職場なのか、どんな環境なの

か、一切関係ありません。クリスチャンの勝利の一番のポイントは、これがあるかないかなのです。そのスタートは、人間の底を見たのかどうかです。それで、周りの人を見るときに、依存症の人を見るときに、その底を見るようになるので、そういう人に神様は救われるべきたましいを起こしてくださいます。神様がなさることを見るのが伝道です。なぜ見られないのでしょうか。まだ人間の底を見ていないのです。話はいっぱい聞いてても刺さっていないのです。自分のものになつていません。まさか、まさか、キリストが私のために十字架にかけられるなんて。まさかでしょうか。十字架と私と関係ないのでしょうか。

そして、信者として、自分の中に、今申し上げましたこの内容ではなくて、違う戦いがもしあれば、それがどんな内容であれ、それはまだ底を見ていないという裏返しなので、「神様、自分の底、人間の靈的根本を見る能够ができるように、恵みを与えてください」と恵みを求めて、祈りましょう。そこからスタートなのです。皆さんのがいくら成功したのか、学校で成績がどうなのか。それは二の二の二の次の話なのです。仕事がどうなのか、どんな職場なのか。それはずっと後の後の話です。これができないのに良い職場にいったからといって何がいいのでしょうか。未だに3.6.11なのです。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。神の一方的な恵みによって、私たちはキリストを信じることができて、靈に命が与えられているこの恵みを感謝します。しかし、にもかかわらず、未信者と同じ状態、死んでいる靈の状態なので、どうか自分の人間の底を見る能够ができるように聖靈様が働いてください。十字架の前で自分を改めることができるように。これを古い考え方をもって邪魔する悪魔、惡靈の働きを見抜いて、それを退けて、ひざまずいて人間の根本を見るその目が開かれる幸いを豊かに与えてください。それで残りの生涯、本当に答えのあるいのちの運動の主人公として用いられるように祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。